

## 『英語テスト作成の達人マニュアル』

静 哲人 著 (2004)

大修館書店 293pp.

山 口 高 嶺

早稲田大学 助手

本書は、英語テストを作成する上での筆者の5つの提言を、小テストの作成・定期テストの作成・入学試験問題の作成という場面で展開し、具体的にどのようなテスト作成が望ましいか、逆に望ましくないかを、指摘する。

第1章では、英語テストを論ずるための基礎概念を扱い、一次元性、信頼性、妥当性、波及効果、実用性、トレードオフなどを定義している。妥当性の中でも特に最近注目されている社会影響的妥当性にも触れており、この妥当性の重要性からも筆者の提言が生まれているようだ。

第2章が本書の中心と思われるが、先の5つの提言が挙げられている。

1. 応答として受験者が日本語を生成することを求める問題はやめ、英語を生成することで応答する問題のみ、あるいはそれに加えて記号による応答を求める問題のみにせよ。
2. いわゆる総合問題はやめ、1つの英文素材に対して施す「変形」は多くとも1種類にせよ。
3. それに従うことが受験者にとり最も効率的で有利であるような指示にせよ。
4. 「～点満点のテスト」を作成するという発想を捨て、「～項目からなるテスト」を作成する、という発想をせよ。
5. 授業内容に基づく定期テストなどの **achievement test** と、実力テストもしくは入学試験などの **proficiency test** は全く別のものであることを認識し、それぞれに応じた問題形式にせよ。

1.では、英文和訳問題を一番厳しく批判し、それより許容はできるものの、英文の要点を日本語で書かせる問題も批判の対象になっている。

第3章では、小テストの作成である。漠然と小テストの例を挙げていくのではなく、ユニークな5角形を駆使しながら、何を測定しようとしている小テストなのかという問いを常に発しているこの章にも考えさせられる。次章の定期試験と比べると、1回1回の小テストの信頼性は多少低くても構わない、毎回小テストを行うことで信頼性が学習者に対す

る測定の精度が上がっていくとのメッセージが強烈だ。

「1961年に Lado により出版された *Language Testing* を出発点とする言語テスト研究の歴史は、もうすでに 30 年を越えた」ものの、「achievement test に関する見るべき研究がほとんどない」（根岸雅史, 1995）現状では、実に豊富で説得的な章である。

第 3 章の流れを引き継いで、第 4 章では、定期テストの作成である。「たいていの英語教師がその作成にかかわっているのは、中間・期末試験などの achievement test である、proficiency test の作り手となることはきわめてまれ」（根岸, 1995）という現状は未だ変わっていないように思えるが、そうであるからこそ、有益な章である。ここででの中心命題は、定期テストに出題するものは授業ですべて行っていなければいけないし、定期テストは授業で行ったものでしか行ってはならないのだから、理想は学習者全員が満点をとってもよいものだ、というもの。

第 5 章では、入学試験問題の作成である。社会影響的妥当性の重要性、及び筆者のあるべき英語学習者としての「日本語抜き英語教育」という観点から、再び、日本語応答の試験、英文和訳問題の排除が提言される。また、信頼性の高い試験作成のために項目を増やすことを提言する。形式面に絞るならば上智大学のような出題形式がよいということか。

あとがきにあるように、若林俊輔、根岸雅史（1993）の内容を受け継ぎその理念をさらに深化・発展させたものと言える。例えば、若林俊輔、根岸雅史（1993）でも、総合問題をなくしていくようにという提言がなされているが、なくさねばならない明確な根拠は載せられていなかった。本書には一つに「ミニクサ（醜い・見にくい）」、また信頼性を低下させかねないとの根拠も挙げられている。

テストの持つ影響の強さは、たとえ学習者に対するものひとつとってみても、大きい。また、テストとは何か、テストの作成法とは、などといったことを学ぶことは、現行の英語科教員免許を取得するための必要要件になっていない。「測定」や「評価」すら入っていない。それだけに、具体的かつ豊富な小テストの例を交えて、筆者の理想とする授業に向けてのテスト論は、個人的に賛否はあろうとも、熟考すべき題材と言える。

## References

根岸雅史（1995）「リーディングのテストと評価」『英語教育』大修館書店。

若林俊輔・根岸雅史（1993）『無責任なテストが落ちこぼれを作る』東京：大修館書店。